

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580110

研究課題名(和文) 日本留学・日本語学習経験を有するキャリア成功者から見えるグッドラーナー像の分析

研究課題名(英文) An Analysis of the Factors for Good Learners: A Good Learner as a Successful Person in his/her Career after a Period of Stay in Japan as an International Student

研究代表者

三浦 香苗 (MIURA, Kanae)

金沢大学・国際機構・名誉教授

研究者番号：50239175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本留学・日本語学習経験のあるキャリア上の成功者をGood Learner(GL)とし、その属性を探索的に抽出した。

PAC分析の手法で個別のGLが描く「GLの構造」を求めた。それは「学びの輪・必要時に集中して学ぶための支援機能・他の支援機能」から成り、探究心が引き金となって作られる学びの輪が、周辺の金と時間を媒介とした支援機能の働きで活性化する。100名の日本語教師への質問紙調査と、海外の20名のGL(大学教授等)への面談調査により、GLの特性を抽出した。GLには個人差があるが、同時に、専門、国、生育環境、時代、宗教等によって、共通特性が導かれる可能性が示唆され、研究は現在進行中である。

研究成果の概要(英文)：This research was conducted to clarify the characteristics of the Good Learner (henceforth, GL) in terms of both a qualitative and a quantitative analyses.

"The structure of GL and its surrounding factors" were articulated utilizing the methodology of PAC Analysis. It was found that the structure consists of "Learning Cycle," "Supportive Function to Work Hard when Necessary," and "Other Supportive Functions." It was also found that "Learning Cycle" is activated being triggered by "Other Supportive Functions," which were further stimulated by "Money" and "Time," as intermediary variables. The characteristics of GL were extracted through a questionnaire survey to 100 Japanese language teachers as well as an interview to 20 GLs currently university professors. Although it became clear that every GL has unique characteristics, it is suggested that his/her specialty, country, religion, and the environment, etc. may lead to the shared characteristics of GLs.

研究分野：日本語教育

キーワード：Good Learner 日本留学 グローバル人材 学習者の属性 支援環境 PAC分析 テキストマイニング 共分散構造分析

## 1. 研究開始当初の背景

本研究で使用する言葉の定義：日本留学・日本語学習経験を有し、キャリア上の成功者となった元留学生を **Good Learner (GL と略す)** と呼ぶ。

日本の高等教育への期待として、グローバル教育人材育成へのニーズが高まっている。中でも、留学生は、多言語能力、多文化理解能力が高く、高度人材の即戦力として期待されている。一方、CEFR 等の言語学習観の広まりを受け、言語学習を単なる外国語スキルの獲得としてでなく、個人のライフステージや自己実現の中に位置づけて考える思想が浸透しつつある。また同時に、言語教育と専門教育間の円滑な接続・連携の必要性も指摘されている。本研究は、それらの学術的背景の延長線上に位置づけることができる。

研究代表者は、現研究機関において 1995 年以来、大学院入学前予備教育を担当し、これまでに 190 名を超える国費研究留学生の日本語教育に携わってきた。18 年間にわたる修了生との往還を通じ、予備教育期間中に優れた日本語学習者であった者と、キャリア上の成功者（大学教員、政府機関、グローバル企業等で活躍している高度グローバル人材とする）には相関があると感じるに至った。よき日本語学習者は、日本語学習だけでなく、様々な学習・人生方略に長けていた。将来構想も具体的であり、自律学習能力やタイムマネジメント能力も高い傾向にあった。しかし、このような、留学後 5 年、10 年と経過したキャリア成功者と日本語学習・留学との関係について分析し、優れた学習者の特性抽出や、その学習者の育つ環境を含めた構造についての研究は、管見の限り無い。

そこで、そのような Good Learner(=GL) 像を明らかにしたいと考えた。GL の属性と GL の構造を報告することで、今後の留学生教育、特にグローバル人材教育のための教育プログラムの改善への一助となりたい。

本研究の推進により、日本留学と日本語学習歴のある外国人キャリア成功者の成功要因が明らかになることが予想される。その知見は、グローバル人材教育事業に有用である。同時に本研究で提案する研究手法は、日本語教育における学習者要因研究の推進にも有益である。

## 2. 研究の目的

本研究は Good Learner(=GL)の属性を探索的に抽出し、さらに GL を育てる構造を明らかにすることで、日本語教育・専門研究・キャリアへと円滑に移行するグローバル人材育成教育への一助となることを目指すものである。

## 3. 研究の方法

調査対象者を GL 本人のみに留めず、日本

語教師も対象とする。また、質的・量的の両面から分析を行うことによって、GL の属性と、GL が育つ構造を立体的、かつ総合的に明らかにしようとする。

留学終了後 5 年以上経過し、既にキャリア上の成功者として活躍している人物(20 名程度)を対象に、インタビュー調査を行い、テキストマイニング、および PAC 分析の手法で質的分析を行う。また、留学生を教えた経験を有する日本語教師(100 名余り)を対象に質問紙調査を実施し、共分散構造分析の方法で量的分析を行う。

過去の研究において、グッドティーチャー Good Teachers に関する研究(顔・渡部他 2007)や、音声習得におけるグッドラーナー研究はみられるが(戸田 2006)、日本の大学で日本語を学ぶ留学生を対象としたグッドラーナー像は本研究が初である。日本語教育に限らず、第二言語習得研究の分野において、学習者の個人差、または学習者要因と呼ばれる研究が少ないのは、個人差の要因の概念構成が難しく、またそれを測る方法を、妥当性をもたせて確立することが困難であることによる。本研究は量的には共分散構造分析、質的にはテキストマイニング、PAC 分析の手法を用いて、GL の要素を探索的に抽出する手法を提案することで、学習者要因に関する研究への一つの可能なアプローチの提案も行うことになる。

具体的には以下のことを行った。(1)に関しては、研究成果の学会発表を行った。(2)以降は 2015 年 5 月現在、結果を集積し、分析中であり、近い将来発表の予定である。

### (1) PAC 分析(Personal Attitude Construct Analysis)の手法で描く GL 像

「個」へのアプローチとして再現性・信頼性の高い質的研究方法である PAC 分析の手法を用いて、個別の GL が描く「GL の構造」を明らかにした。対象者はトルコ人 GL 1 名で、現在はトルコの大学の准教授であり、政府機関での研究も行い、「知識経営」を専門とする。PAC 分析の開発者である内藤(2002)と丸山(2007)の方法を参考にして、次のことを英語で行った。

まず半構造化されたライフストーリーインタビューを 30 分程度行い、調査対象者の生い立ち、研究、将来への展望、信念などについて質問していき、最後に自分なりの GL の定義を述べてもらった。(他の調査においても、これと同様の半構造化インタビューを行った。)

次に、GL という言葉から自由に連想する言葉を 10 個、カードに書き、重要度順に並べ替えてもらう。

カードを一度に二枚ずつランダムに組み合わせ(45 組)、カード間の距離感を、「大変近い」から「大変遠い」までの 7 段階で評価してもらう。

調査者がそのデータを PC に入力し、クラスター分析によるデンドログラム(樹形図)を作成する。

本研究では、非類似度行列の作成までは PAC 分析支援ソフト(土田義郎「PAC Assist(s7)20080324」)を使用し、次にフリー統計ソフト R(ver.3.1.1)を使って、PAC 分析で作成された非類似度行列のデータをもとにクラスター分析を行い、三つのクラスター ABC をもつ樹形図を得た。

クラスター A には、で調査対象者が自由に連想した 10 個の連想語のうち「探究心」「良い資料へのアクセス」「学ぶことができ学び方を知っている」が入り、B には「家族」「必要時に集中して働ける」「時間」が入り、C には「技術的支援」「良い先生」「金 money」が入った。

樹形図を見ながら調査対象者が自由に話した。(このときのみスカイプ使用)

調査対象者は、それぞれのクラスターに名前をつけ、連想語間の関係を考えていった。その結果、クラスター A は“Learning Cycle(学びの輪)」、B は“Supportive Function to Work Hard when Necessary(必要時に集中して学び働ける支援機能)」、C は“Other Supportive Functions(その他の支援機能)”と名付けられ、連想語間の働きが説明された。

調査対象者は以下のようにまとめた。

GL にとって大切なことは「探究心」をもつことで、しかも「学び方を知り」「学んだことを活用できる」という自分自身の特質・能力を備えていることである。それによって「良い資料へのアクセス」もできる。それを支えるのが時と金を媒介とした支援機能である。

以上、PAC 分析による研究方法と、調査対象者が描いた GL の構造を述べた。(担当:三浦)

#### (2) 海外の大学や企業に在籍する GL へのインタビュー調査

インドネシア、ベトナム、タイに赴き、現地の大学で教授等として、あるいは、現地企業の管理職として活躍中の GL に面談で半構造化インタビュー調査(上記(1)のと同じ)を行った。

目的は、調査対象者へのライフストーリーインタビューによって、調査対象者の属性と研究・勉学に対するビリーフ等を抽出することである。

調査対象者は、インドネシア人大学教授 8 名、ベトナム人大学教授 3 名、講師 1 名、企業管理職 1 名、タイ人大学講師 4 名である。

インタビュー結果の分析は KH Coder を用いたテキストマイニングの方法で行う。(担当:三浦、松田)

#### (3) 日本国内の大学に在籍する GL へのインタビュー調査(上記(1)のと同じ)

対象者は、タイ人、チェコ人、アルゼンチ

ン人各 1 名で、准教授である。分析は(2)と同様に、テキストマイニングの方法で行う。(担当:三浦、松田)

#### (4) 海外の政府機関に在籍する GL へのインタビュー調査(上記(1)のと同じ)

対象者は、アフガニスタン人、リビア人各 1 名である。分析は、テキストマイニング及び PAC 分析の方法で行う。(担当:三浦)

#### (5) 日本語教師に対するアンケート調査

目的は、教師が考える GL の属性を抽出すること、対象者は、100 名以上の日本語教師である。web 上で行った。

アンケートの方法は、GL の属性を述べた 88 の質問項目について、その教師が教えた学習者中の GL であった者を思い浮かべ、6 件法(当てはまる 6 ~ 当てはまらない 1)に「回答不可」を加えた 7 つの数字の一つにチェックするものである。

質問は、次の 5 つの因子から選んだ。

- 柔軟性(例:失敗を恐れない)
- ストレージ使用(例:リソースやツールを活用できる)
- 認知力(例:記憶力が良い)
- 情意面(例:高い動機を維持できる)
- 学習環境(例:日本語のインプットとアウトプットができる環境にいる)

この調査については、2015 年 5 月現在、結果を集積し、分析中である。分析は、共分散構造分析の方法で量的分析を行う。(担当:渡部、松田、三浦)

#### 【参考文献】

- ・顔幸月・渡部倫子・小林明子・縫部義憲(2007)「台湾の大学生が求める日本語教師の行動特性 - 日本語専攻の場合 - 」『日本語教育』第 133 号、日本語教育学会、pp.67-76
- ・戸田貴子(2006)『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究 平成 16~17 年度科学研究費補助金研究成果報告書』基盤研究(C)(2)課題番号 16520357
- ・内藤哲雄(1997)『PAC 分析実施法入門 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- ・丸山千歌(2007)「日本語教育の文化トピックからの学習者の発想 学習者とのインタラクションの解明に向けた PAC 分析法の有効性」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、pp.161-184

#### 4. 研究成果

上記 3 の(1)より、PAC 分析の手法で個別の GL が描く「GL の構造」を求めることができた。それは、「学びの輪」と「必要時に集中して学び働くための支援機能」と「その他の支援機能」から成り、「探究心」が引き金となって作られる「学びの輪」が、周辺の「金」と「時間」を媒介とした支援機能の働きで活性化するという構造である。成功者であるためには、その素質や能力が優れているだけで

は不十分で、「支援機能」と自分自身の有機的結びつきが大切である、という結論が GL 本人の個としての体験から導かれた。

この結果は、あくまで「個」の見解によるものである。普遍的な「GL の構造」とどう関係するかは、さらなる研究によって検証される必要がある。

上記3の(2)(3)(4)の調査結果の分析は未完了であるが、大体の感触は得ている。すなわち、一人ひとりの GL は、個性的であり、それぞれ際立っているが、同時に、専門領域、出身国、宗教、育った時代等によって共通特性が導かれる可能性がある。そのことを検証していく所存である。

上記3の(5)の日本語教師による GL 像が近い将来確定できると、(1)から(4)の結果を合わせて、GL の属性および GL が育つ構造が立体的、かつ総合的に明らかにされるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

三浦香苗・渡部倫子・松田真希子「日本留学経験のあるキャリア成功者が描いた Good Learner 像 PAC 分析の手法で」日本語教育学会中国地区研究集会、岡山大学(岡山県・岡山市)、2014.12.20

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

三浦 香苗 (MIURA, Kanae)  
金沢大学・国際機構・名誉教授  
研究者番号：50239175

### (2)研究分担者

松田 真希子 (MATSUDSA, Makiko)  
金沢大学・国際機構・准教授  
研究者番号：10361932

### (3)研究分担者

渡部 倫子 (WATANABE, Tomoko)  
広島大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号：30379870